

吉祥寺

「吉祥寺」——その地名を聞くたびに懐かしく、愛おしい気持ちになる。私生まれ、三歳までいたところなのだ。

私が住んでいたのは、東京都武蔵野市の吉祥寺駅近くのアパートだった。四畳半一間に両親と私が住んでいた。布団一枚にみんなで寝ていた。

父は当時大学生だった。一家を養うために進駐軍でアルバイトをしていた。父と母が知り合ったのは終戦直後のドサクサの中、帰省列車のことだった。そのとき父は二十歳。陸軍士官学校に行っているときに戦争が終わった。母は三十五歳。戦前は東京で小学校の教師をしていた。父は母のことを五歳くらい年上と思っただけ。彼には女性を見る目がないのだ。どういう訳か二人は深い仲になり、母のアパートに父が転がり込んで同棲生活が始まった。そのうち私が母のお腹に宿って父は大慌て。母が十五歳も年上ということにもびつくり仰天！ 父曰く「あまりにも社会通念上許されないことだ」と。よくそんなことが他人事のように言えたものだ。取り敢えず（？）、父の母が私を引き取って育てることになったものの、いろいろあったのだろう、二人は正式に結婚して、私は両親が揃った家庭で育つことができた。父は私に「ありがたく思っ感謝しろ」という態度で話した。なかなか納得できなかったが……。

吉祥寺にいたときの思い出は今も鮮明に覚えている。いつもまわりの人たちに大切にされていたという印象がある。

友だちはたくさんいた。毎日十人くらいで日が暮れるまで遊んだ。「すずめちゃん」という名前の子がいたことを覚えている。雪の日、私は外で遊べなかった。長靴を持っていなかったからだ。私は羨ましそうに窓

福島みゆき

の外をいつまでも眺めていた。

ある日、突然両親の故郷に引越すことになった。父が大学を卒業して、郷里の銀行に就職したのだ。アパートの人たちや遊び友だちがいつまでも見送ってくれた。

その後、東京の大学に進学した私は、そのアパートを訪ねたことがある。アパートには私のことを覚えていてくれた人もいた。空き部屋があったら入りたいと思ったが、満室でかなわなかった。

……今でも懐かしく「吉祥寺」のことを思い出す。

